

書簡を通して見た前間恭作と小倉進平の交流

——『郷歌及び吏読の研究』刊行の昭和四年を中心に——

白井 順

一、はじめに

前間恭作（一八六八—一九四二）と小倉進平（一八八二—一九四四）はどのような関係だったのだろうか。

明治四四（一九一一）年、前間恭作は朝鮮総督府通訳官を退官し、帰国後は在野で朝鮮語の研究と朝鮮の歴史文化の研究を続け、大正二三（一九二四）年には東洋文庫へ蔵書を寄贈した。東洋文庫への寄贈後、東洋文庫論叢として発表した『龍歌故語箋』（大正一三年二月）・『雞林類事麗言攷』（大正一四年六月）を始め、朝鮮古典語と朝鮮書誌・朝鮮史に関する研究を発表するが、前間がどのように研究を進めていたかについて明らかにした先行研究はこれまでにない。

一方、小倉進平は、自著で前間恭作との交流について触れているにもかかわらず、鄭承喆「小倉進平の生涯と

「学問」⁽²⁾や安田俊朗『言語』の構築―小倉進平と植民地朝鮮⁽³⁾』などの先行論文では、二人の関係について全く言及がない。今回、小倉進平氏御令息・芳彦氏（元学習院大学学長）の御厚意により、御自宅で保管されていた御尊父宛ての前間の私信を資料として使わせて頂いた。⁽⁴⁾前間の資料であるが、一九八〇年九月一六日、御遺族は、自宅で保管していた前間の私的資料を在山楼文庫として九州大学へ寄贈された。これによって、九州大学在山楼文庫所蔵の前間恭作宛私信との対照が可能となり、二人の交流の具体的な内容が分かった。

在山楼文庫所蔵書簡資料と小倉芳彦氏所蔵書簡の両者書簡を突き合わせて、二人がどのような関係だったのか、また互いに対してどういう心情を感じていたのかということをはっきりさせることが、本稿の目的である。本稿は多分野に新資料として提供し、研究を裨益するべく、可能な限り両者の書簡を翻刻した。紙幅の都合上、一部省略したものである。

前間恭作と小倉進平に共通するのは、朝鮮古語の歴史的考察である。小倉進平は『朝鮮語学史』（大正九年一月）を出版し、前間も大正九（一九二〇）年にハングルを使用した最古の文献として知られる李氏朝鮮の建国叙事詩「龍飛御天歌」の古語を解説した『龍歌故語箋』を執筆し、大正一三（一九二四）年に東洋文庫論叢として刊行するなど、互いに朝鮮古語の歴史的変遷を踏まえた研究をしていた。昭和四（一九二九）年、小倉進平は文献的資料に基づいて新羅の歌謡（郷歌）を解説し、助詞や助動詞を漢字で表記した公文書（吏読）の用法を調査した『郷歌及び吏読の研究』を発表した。

大正一三（一九二四）年に小倉は、『郷歌及び吏読の研究』を脱稿したものの、「当時は外遊中であつたので朝鮮古語の唯一の指針たる『龍歌故語箋』を参照することが出来なかつた」と小倉自身が述べているように、当時の朝鮮古語の研究では前間恭作と鮎貝房之進、そして小倉の師・金沢庄三郎のみであつたと言つても過言ではなかつた。

なかでも前間は『郷歌及び吏読の研究』刊行直後の五月一〇日にその書評を書き、七月に『史学雑誌』(四〇ノ七)に掲載したのみならず、『郷歌及び吏読の研究』読後に「処容歌解読」の原稿を執筆し小倉に送った。小倉は『郷歌及び吏読の研究』に書評を寄せた学人―前間恭作のほかに、高橋亨・土田杏村・金沢庄三郎・梁柱東が該書を批評⁶⁾のなかで、とりわけ前間のことを、「最も感謝すべき、真摯なる批評と指導とををしまれなかつた方」と明記している。該書は、昭和一〇(一九三五)年には帝国学士院恩賜賞が授与され、日本における朝鮮古語研究の金字塔であるのみならず、小倉の研究史においても『増訂朝鮮語学史』(昭和一五年刊行)に至るまでの画期をなす集大成であった。

前間は『校訂交隣須知』(一九〇四)・『韓語通』(一九〇九)・『龍歌古語箋』(一九二四)・『鷄林類事麗言攷』(一九二五)・『朝鮮の板本』(一九三七)・『半島上代の人文』(一九三八)・『訓読史文』(一九四二、没後刊行)・『古朝鮮譜』(一九四四・一九五六・一九五七年没後刊行)などの著書を残したが、それらは朝鮮語研究のみならず朝鮮書誌学においても、今なお朝鮮学の基礎的文献として生命力を保っている。前間は白鳥庫吉の指導によって蒐集された白山黒水文庫を調査し、昭和二(一九二七)年八月、分野ごとに分類した朝鮮本の解題『鮮冊名題』を書き、その後朝鮮本における『四庫全書総目提要』ともいうべき『古朝鮮譜』として完成を見る。昭和三(一九二八)年、前間は孫晋泰『朝鮮古歌謡集』の執筆を助け、序文を記した。その過程で前間自身も昭和四(一九二九)年には『朝鮮歌曲大全』(『校注歌曲集』)の編集に取り掛かっており、『龍歌故語箋』・『鷄林類事麗言攷』に続く朝鮮古語研究の文献として東洋文庫から出版するはずであった。昭和五(一九三〇)年八月に前間は体調を崩し、一〇月には福岡の箱崎に隠居した。昭和一二年に旧稿を増補し朝鮮本の活字・鋳字などの版本研究の智識を記した『朝鮮の板本』を出版したが、結局『朝鮮歌曲大全』(『校注歌曲集』)は出版されることはなかった。昭和一五年に前間は

高麗末朝鮮初期の特殊な公用文で書かれた『吏文』を訓読する仕事に取り掛かり、昭和一六年七月に完成したが、公刊を待たずして翌年一月二日に亡くなった。

昭和四年時点で話をもどすと、前間は小倉の著書の書評以外に、「吏読便覧について」(『朝鮮』一六五)、「処容歌解読」(『朝鮮』一七二)、「庶孽考」(公刊は歿後『朝鮮学報』五・六)等の諸論文を発表し、昭和六年には「真興碑につきて」(『東洋学報』一九〇二)も発表するが、これらはもともと書簡で受取人が公表すべきものと考え、公刊に至った経緯がある。前間は東洋文庫への寄贈直後には、「三韓古地名考補正」(『史学雑誌』三六〇七)、「新羅王の世次と其の名につきて」(『東洋学報』一五〇二)、「若木石塔記の解読」(『東洋学報』一五〇三)と矢継ぎ早に論文を発表し、朝鮮史学の基礎ともいえる碑文の解読に尽力していた。それなのになぜ前間はこれ以降論文を書かなくなったのか、その理由が昭和四年の『郷歌及び吏読の研究』に関わる小倉との往復書簡で明かされる。

今回使用させて頂いた小倉家所蔵の「前間先生書簡綴」は、小倉が昭和四年から昭和九年にかけて前間が寄せた書簡を纏めて一つに綴ったもので、前間自筆写本の幣原坦著「校訂交隣須知の緒言と批評」と前間の自筆原稿「交隣須知と隣語大方」という二冊の小冊子とともに封筒に入れられた上に紐で括って保存してある。昭和一一(一九三六)年に小倉は「交隣須知」について「を發表するが、この小冊子に依拠にして執筆したことを小倉自身が論文で述べている。小倉家所蔵の小冊子も、実は小倉進平著『郷歌及び吏読の研究』を前間が読んだことに執筆動機があり、小倉が以前公刊した『朝鮮語学史』を増補修訂するに際して不可欠な資料や知識を前間が蔭に助けていたことが窺える。小倉進平の旧蔵書は東京大学文学部図書室が所蔵するが、その内の二十八冊は中村庄次郎の旧蔵書であり、上記小冊子に関連する中村氏筆写本『交隣須知』も含まれている。前間は小倉のために中村旧蔵の『交隣須知』等を筆写し、小冊子と共に小倉に送ったのみならず、小倉に中村を紹介し旧蔵書を譲り受けるアドバイスも

した。昭和八年に小倉は東京帝国大学文学部言語学科の主任教授となり、日本言語学会の創立に尽力し、昭和一八年に退官してその翌年二月八日に亡くなる。前間の死から、わずか二年後、まさに後を追うようであった。

九州大学所蔵在山楼文庫には、『郷歌及び史読の研究』（J—一三）、『増訂朝鮮語学史』（J—五七）、『南部朝鮮の方言』（J—七五）等小倉が前間に献呈した著書があり、また遺族が寄贈した『朝鮮語に於ける謙讓法・尊敬法の助動詞』（国史一四A八二）、『小倉進平博士短編集』（国史一四A七一）等前間が小倉に宛てた書簡の控や小倉からの書簡を添付した書籍もある。前間は東京赤坂に住み、小倉は京城に居り、前間が箱崎に転居したあとも、昭和八年には小倉が東京に住むことになり、二人は直接会う機会が少なかった。故に抜刷を郵送したり、書簡を送ったりして、恰も通信教育のように研究上の情報を交換していたのだが、それは研究上の付き合いに止まらず、自分の苦悩や喜びを理解してくれるかけがいのない相手としてお互いを感じていた交流であった。

二、前間恭作と小倉進平

前間恭作は小倉進平より一四歳年長で、一九一一年に総督府通訳官を退官したのち、朝鮮の地を一度も踏まなかつた。一方、小倉は一九一一年に総督府学務局編輯課勤務となり、前間とすれ違いに朝鮮へ渡った。大正三年七月二二日、小倉の師・金沢庄三郎は当時の小倉の上司・小田省吾に「諺文変遷の表に関する件は吏道諺文の代表的古書（大明律広解、仏経諺解・真言集等）凡数葉写真石版としこれに欧文にて説明を加へる小冊子を編纂ありては如何に候哉御賢慮の上若し可能（なら）バ小倉氏に原稿作成せしめられ度」と手紙を認めており、小倉の仕事の一端が窺える。前間恭作と小倉進平は何時面識を持ったのか、正確に裏付ける資料は現在のところ捜し得ていない。大

正九年九月一日付の書簡があることから、小倉の『朝鮮語学史』（大阪屋号書店、一九二〇年一月）出版以前に既知の間柄であったことが分かる。大正九（一九二〇）年に小倉は朝鮮総督府の朝鮮語辞典編纂委員の任にあり、全羅道・咸興道などの方言調査を行っていた。当時前問五三歳、小倉三八歳、東京に住む前問が、京城の小倉に宛てた書簡には次のようにある。（不明字は□□で表記した）

該本は古本に似せ刻したるは誠に結構にて殊に用紙にロールを用る至極質素に製冊致したるなど朝鮮の存外感心と存し該本頂戴屢々反覆愛読仕り候厚く御礼申上候□御近業は如何に候哉小生も暫く朝鮮のことに遠なり居りたるもやつぱり□に相成は之れが一番興味有り□□□□ツイ先般より三国史記遺事、高僧伝、真興三碑日本紀などに暇をつぶし。京都大学の多田君のために『龍歌古語箋』なる一冊子を稿し。など致し候が近業に有り。金沢君は本業は韻鏡でフォネティックの研究に。又アイノ語のマトメなど熱心のやうに見へた。浅見君は例の李王族の実記の編纂に没頭時々見え申候。小生今回の訓蒙字会は実は龍飛御天歌の注釈つまり語法の変遷につき考察中に字会の原板本の存否につき疑問の有りたるためになり。御蔭にて大に判明仕り候。矢張り鮎貝君が金沢に送りたる板本と同一のものを再刻したるにて、何れも後年の手入れ本に有り、現今にては字会も魚叔権（白井注…崔世珍の誤記か？）の原刻は見るを得ずなは類合、千字文の嘉靖以上の板本存せざると同一と存し申候。併し字会は類合・千字と異りて同魚叔権（白井注…崔世珍の誤記か？）の四声通解（正徳刻）などに参考致し得は今の本も原板の面目を割合い改めざるものなるは疑なく矢張り嘉靖末より萬曆位迄に出来たるものと存じ申候。

文中には『龍歌古語箋』を多田桓のために記したことが述べてあり、東洋文庫所蔵『龍歌古語箋』（一—一—J—六）の初稿序文と一致する。『龍歌古語箋』が出版されたのはこの四年後であるが、このとき前問が小倉に訓蒙字

会を借りた理由も『龍飛御天歌』のハンゲル歌詞注解を通して朝鮮語の歴史の変遷を研究するためであった。そして、小倉は同年の一月に『朝鮮語学史』(大阪屋号書店)を出版し、前間に献呈した。大正一〇年一月八日付の書簡は、小倉の『朝鮮語学史』献本に対する前間の返礼である。

拝啓 時下御清穆奉大賀候 扱御高著朝鮮語学史遙々御惠贈被下一昨日拝到早速二回程通読仕候私にとつては生来始めて遭逢仕候興味ある文字にて手を離し得ざる程に今日も反覆仕候。全部に亘る該博なる御智識の爲せる所只々感服の外無く諺文創作に關し実録を引用の説明。韻書に關して韻考と正韻との御解釈何れも迷夢を破るのにあらざるなく訳解類の成化板圓覚經の挿画未見のもの確かに渴仰のものに奉存候。実は此書の中にも羅麗以来の言の変遷につきても御高見の一端多少窺ひ得べくと存じ候処……(中略)つまり今回の御著述は此後引続き見つれて学界に紀元を劃すべき御大著「朝鮮語の歴史」の緒論なるに過ぎざるものと相分りその書を拝読する歡喜の一日も早からんことを祈上たてまつり候。小生も昨年正月龍飛御天歌の古語を全部現代語と比較仕り「龍歌古語箋」なる百頁計りの一冊子(京都大学に稿本寄贈)を久し振りに編述仕り候などの關係にてこの頃は特に朝鮮語の変遷に興味相出し(只今にて旧著韓語通と反対の議論も得候ことも不少)候央には有り又御高著に多く見れたる書史に属する節は年来格別に興味を有り候ものには多く御高著は実に無此上面白く拝見仕り候何れ□□始終拝見或は御指教を仰ぎ候やうのことも可有り宜しく願上候

小倉著『朝鮮語学史』緒言には「之を以て今後建設せらるべき朝鮮語の歴史的研究の一小階梯たらしめんと欲するに過ぎぬのである」とある。前間の書簡をみると、前間は小倉によって築かれるべきその「小階梯」の先にあるものを期待していた。大正一四年七月二五日発行の『史学雑誌』(在山楼文庫J一三五)の巻末には、前間恭作の直筆で「龍歌古語箋麗言放 配本」というメモが添付してあり、浅見倫太郎・多田桓・岡田信利・鮎貝房之進・小田

省吾・高橋亨・塩川一太郎・小倉進平・平山正・武田尚・大木安之助・隈本有尚と献本先を記してある。後引する書簡の中で、前間の著書を受け取った当時小倉は外遊中（一九二四～二六年）であったと述べているように、東京大学所蔵小倉文庫の洋書には、前間恭作からの書簡が挟まっている。外遊のあと、一九二六年の開学と同時に、小倉は京城帝国大学教授となった。先述の九州大学所蔵『小倉進平博士短編集』（国史二四A七二）は、小倉自身が前間恭作に郵送した抜刷集であり、前間の遺族が製本し、昭和二〇年に九州帝国大学へ寄贈したものである。「嶺東方言」、「威鏡南道方言」、「嶺西方言」、「とき名義考」、「朝鮮語の『TOIN-STO』」、「平安南道道の方言」などを収録する。『小倉進平博士短編集』所収「とき名義考」（昭和三年『民族』十一月号）、「朝鮮語の『TOIN-STO』」（岡倉先生記念論文集）、昭和三年（二月）は、二編一緒に前間の許に郵送された。前間は昭和四年一月二三日に、小倉へその拝受の返礼を認めた。

本日は岡倉氏還曆御論文の「朝鮮語の된시우」別刷美事な紙に印出したる一本並びに『民族』に御投稿の「とき」御送付被下拝領両方とも野生の極めて興味を有してゐます問題で御芳志厚く御礼申し上げます。朝鮮語のロマニゼーション及된시우音のことは私共は三十年程前に京城にコリアン、リポジトリイ月刊のときにその紙上でハルバート及ベイヤドなど素人が噪ぎました頃に私は韓語通を執筆致して居りましたのでその渦中に入つて同書に変な意見が残っておりますが、想へばやがて半世紀にもなります。

ハルバート⁽¹⁰⁾が雑誌『The Korean Repository』で提唱したロマニゼーションが自分の『韓語通』に影響を及ぼしたと、前間は小倉に告白している。この時の前間には過去の著書に反省を感じている心境が窺える。この書簡の後、三月に小倉は代表作『郷歌及び吏読の研究』を発表した。

三、『郷歌及び吏読の研究』を巡って

小倉自序によれば、大正一三年九月に『郷歌及び吏読の研究』を脱稿し、昭和四年三月に京城帝国大学法文学部紀要として出版した。小倉は四月に『郷歌及び吏読の研究』（在山楼文庫J—一三）を前間に郵送した。小倉の郵送に対する返信として、五月四日消印の葉書がある。そこで前間は次のように記している。

拝啓新刷紀要唯今拝到早速開披祇々私にとり金玉、手を離すこと出来ず心をとられ申候爰に世界は朝鮮語につきて千年不滅の完全なる大作を得たりと申すべく、同時に京城大学最初（恐らく近き将来に之が比肩は見ざるべき）の功績は全部尊台に於て専らにせられるたるやうに存じ末輩乍ら御同好の誼として名状致し難き愉悅を覚え申候なほ御書は毎日反覆細読御教誨に浴し度存申候 崔行帰の均如歌序の「三句六名」の解釈だとか吏読の古読に用（ハ）とは書（ハ）と混用し難き等色々このことつぎつぎに思ひ出て何れ前後通読よくよく玩味仕度只々楽しみ居り申候 兎に角私共四十年來の苦悶、容易に御解繙する節無数にて御博通と御見識流石に存じ
一一感歎仕り候

自筆署名は四月五日であるが、消印は五月四日で、小倉は五月四日以降に受け取ったと思われる。翌日五月五日に前間は「平安南北道の方言」（京城帝国大学法文学部研究調査冊子一、昭和四年三月）の返事を書きその価値を賞賛した。

今日是不取敢御精査の関西方言を通読致しました。此前の御取調に比して之は又精到で、今迄只文献丈けで手搜り見たやうにしたものに確かに尋常ならざる御寄与で之れも貴台ならでは決して出来る仕事ではございません

んから小冊子乍ら全く画期的の効用をしてゐると存じます。就けても斯く長年月を断へず有意義の企図の実行を続けて怠られない点は全く人の企及を許さざる所で御冊子の御惠送を受けまして其度に景仰の念深くなりますやうに存じます。御蔭で浅学も大に啓発せられ感謝致して居ります。：（中略）何れ彼の大冊はしっかり反覆莊誦の覚悟でございます。余生はあれをよく読みますことに費して宜しい位に存じて居ります。

前間は小倉の努力と学問的構想のみならず、「余生はあれをよく読みますことに費して宜しい位」と『郷歌及び史読の研究』の学問的衝撃を小倉に伝えた。小倉は四日附葉書と五日附の両書簡を受け取り、五月八日に改めて毛筆で書簡を記した。この書簡は在山楼文庫所蔵『京城帝国大學法文学部紀要』第一の内表紙に添付してある。

拝啓誠に心地よき時候と相成申しましたが益々御清康にあらせられ大慶至極に存じます。

さて今回小著進呈いたしましたところ早速御受取の御手紙を賜り有かたく存じます。実は小生の心行くばかりの著作では無し疑問の点 不可解の点なほ多く世間に公表するは如何と存じ躊躇しました次第ですが、前後の行がかり上已むを得ず出版いたしましたやうな訳であります。老台から御覧になられたならば間違いだらけであると御叱正を蒙る点が極めて多い事だらうと存じて居ります。併し何人かが水中に石を投げねば波紋の起る訳が無いことと存じ自ら進んで学界の犠牲となり踏石と相成つた訳卒心中を御憫察下されたら、殊に御同情深き老臺の御あわれみを得たく存じて居ります。幾多の困難を排して「龍歌古語箋」・「鷄林類事」其の他を公にせられた経路は小生が今回の企てをなしたのと全く同一であります。今回の小著は何れその中各方面からの批評を受け組上の魚となることと存じますが固より覚悟の上であります。つきましては甚多勝手な御願で御座いますが老台に於かせられても御事情の許すかぎり、何かの新聞なり雑誌なりに本書に対する御腹藏なき批評なり紹介なりを御執

筆下さる様には参りませんでせうか。龍歌古語箋やら鶏林類事を頂戴しました時にも小生が色々御紹介申上げる義務があったので御座いますが当時外遊中であつたのでつひ其の機を失しましたことは大変失礼であつたと存じて居ります。」昨今学校では授業以外にも雑務多く餘り落ついて勉強出来ません。それに学校の事業として簡単でよいから鮮日辞書を作つたらといふ計画がありまして、四月からそのほうにも手を出し始めました。その中々本気にならねばならぬと気苦勞ばかりいたして居ります。

先は思ひ出しましたより急に筆をとり、失礼いたしました。敬具

五月八日朝 小倉拝

一方、前間は五月八日その同日に、小倉の著書によって啓発され、これまでの自分の学問遍歴と苦惱を小倉への書簡として書いた。この書簡は二〇枚もあり、手紙というより論文と云うべき内容である。「私の研究」などと大袈裟に申して一寸極りが悪いのですけれども、早いことは材料を申あげれば何をしてゐたか、ゐるかが判りますから、それを申上げます」と、前間は自分が見てきたハンダ資料の詳細・見解を記している。紙幅の關係上、書簡の全てを翻刻することはできないので、前間の学問に対する心情を吐露した部分のみ以下に翻刻する。

拝啓 御力作を拜見致すまでに古語につきての私の苦悶とどんな処にまごついてゐるかを一応御披露申し度いと思ひます。今度この大冊の御教誨に接しましたら、私の進境は全くの別天地に入るといふ予想ですから只今の境地は失せて再び見られないと思ひます。よつて之を一寸書き綴つて見たいと思つたのです。

一 本居先生が古事記に仮名をふられたやうな態度を学んで、一方に早呑込と独断（失礼に当たりますけど）、又一方に多少順序立った推定、この二つをチャンポンにして古記録を読み通ほしてしまふこと、つまり失礼乍ら鮎貝君のやうなやり方に賛成しない。

一 西洋学者の仮定した音韻区分及其変化の規則を我々極東の言語を取扱ふのに応用してそれに拘泥し過ぎて真実を失ふやうになること、金沢君にも多少それがあつたと思ひますが之は避けたい。

先づこの二箇條を私の研究の信条と致したい積りですが、第二の方は言語学の素養の乏しい私としては之を犯す危険はないのですが、第一の方は兎角陥り勝と思ひますので、判らぬものを無理に解釈することは差控へるとしてゐます。それでも私の公に致しました東洋学報の論文はまだよいとして、若木石塔記の解説だとか、坪井先生と往復の古地名考（史学雑誌）などは第一の律令を無視したやうな姿で、今ではそれを出して見るのもイヤです。慚愧に堪へません。

「鮎貝君のやうなやり方」というのは、鮎貝房之進が執筆した「国文・吏吐・俗語・造字・俗字・借訓字」と「三韓古地名考補正を読む」を指す。前間は自分の論文「三韓古地名考補正」（大正一四年）、「若木石塔記の解説」（大正一五年）に対して納得していない。前間は韓国語の歴史の変遷には、周辺諸国言語の影響を考慮する必要があるという思いから、鮎貝と金沢両氏のやり方とは異なる研究方法を模索していた。前間は自分が見てきたハンブル資料を一つ一つ列挙し、解説を附して次のように続ける。

萬曆以後のもので参考につきひますのは乾隆初年全州午隱齋刊の類合と咸豊中坊刻千字文（クランの東洋語□蔵一字三十ミリ本と同本）です。松江歌辞二卷（乾隆初年星州牧刻）も所持してゐますが、これは著者玄孫鄭洵が家本として原形を存するため刻せしめたことは確かです。萬曆初年の歌詞として信用せられるやうですが、また精と省で何か持ち出すほどに致して居りません。又丈溪誌嘉靖旧本にある周世鵬の歌詞（大東野乗の海東新余に抄入もあります）と同じく隆慶頃の李後白の青蓮集稿本（元拙蔵の写定本）にある諺文作歌などもありますが歌詞の方はまた気のりがしませぬのでよく見ません。又経書諺解などありますが今の諺解定本の出来

たのは崇禎末年ですし、崇禎初年に四書だけ刻したときの最初の本（史庫本が総督府にある筈です）にしても時代の上から重きを置くに足らぬと存じます。況んやかの礼記諺読（玉堂で世宗のときに音解だと思つた滑稽の跋文ある本）は一部手許にありますますが手に取る気さへ致しません。乾隆中大部刻の史略諺解卷一（大本二冊）も經書諺解積度のものですし、經書では上に挙げました退溪の積義は語は零碎ですけれども語助の言ひ回しを八か間敷論じて、それがみな嘉靖頃の語で書いてあるので之だけを非常によく見まして其他を見ません。語録解は私は二種所持してゐますが（古写本（康熙中か）と活字本）、これには眉岩の積義が入つてゐると言ひ乍ら本が元來崇禎後に出来た書抜き編撰ですから信用が出来ないと思つてゐます。それから例の洪啓禧が伝写の栗谷諺解を活字にしたものなどこれは全く信用致しません。

挙げて見ますと畢竟それ丈けで如何にも貧弱極まる資料で京城で古書にアクセスする機会を多分に有せられる方から見たら御憐笑になると思ひますが、また思ひますとあまり材料が多くても東大の先生方にも見かけるやうにその処理にも自然に粗漏になり失念も多いといふことになるやうですから少数のものを丁寧にするといふことにも一得はあるやうに存じて自ら慰めて居ります。

こんなことから私は丁寧といふことが癖になりてゐますせいか、仮令ば三国遺事の思内スナにしても一然和尚の時にあつたテキストは頗る怪しいと氣付き、ある歌は中々古風な字の使ひ方をしてゐるかに思はれても中に麗朝中期以下の改竄疑ない書き方も沢山あり、文句にしても丁度かの通行の歌曲集にある文句と松江歌辞にある文句と相異なるやうな工合に元來の文句とは随分変はつてゐると思われます。一例として東京明期の「東京」でも羅代に北原、中原、西原京に対して東原京といふながあつたことは金石に見えますけれども、當時に麗朝の東西京のやうに「東京」といふ言を羅人が用ゐたといふのは聊疑問です。之れなども麗朝に朝楽に採用せられ

て「서훈」を更改したのではないかと思ふのです。

こんな点に往くとやっぱり均如大師の普賢歌が一番確かで大体に於て用字なども三国遺事の歌の多分よりは古いかと存じます（此等はいづれ御高著を見ましたら大に発明できると楽しみに致して居る訳です）。処が均如伝の有賀氏の抜抄は誤りが多いといふ池内君の実話ですから図書館で一通写し取って完全なテキストを作るともりでゐました処が地震で図書館の書庫が移されたり何かのためそれなりにしてまだ有賀氏の本しか持ちません。こんな塩梅になると々々にも手のつけやうなく鮎貝君見たやうに大ザッパにひねくって見る気にはなれなくならずから之れは行詰りとなつた訳です。

前回は在野の研究者としての資料的苦悩と資料そのものの問題を小倉に語っている。また総督府が出版した『朝鮮金石総覧』（大正八年—十二年）の漢字文献に偏重した問題も指摘する。前回は、大正一三年に東洋文庫へ蔵書を寄贈したが、この時に拓本も寄贈した。前回は蒐集した拓本は「中初寺鐘竿石柱記」・「昌寧真興碑拓」・「平壤大同江岸石刻拓」・「南海磨崖拓」・「漢黏蟬碑拓」・「鳳山里院磚文拓」・「原州興法寺真空碑拓」など、浅見倫太郎から入手したものが多い。

金石文にした処で真興碑などを金石総覧を伏せて自分の拓本で精読して見たり、又総覧中の他の金石文についても自分の所蔵なり書冊の中に見えた抄本なりで之を訂正したり字を加へて見たりしますと、あれで中々総覧でよいといふ訳には往かず（方言文字の分は大した差支ないやうにもありますけれど）不足も中々多いので関東埋香碑のやうに書冊のなかに見えて欠けてゐるものも一二に止まらず、目の先の寺刹史料と引合はせもしていないから同書の中にも総覧以上のもの中々多く、言語の方のものでいふと開城南大門鐘の西藏文及西藏行用梵文両様の長文の銘などありません。当時朝廷で朝会に漢字と毛筆を禁じて蒙古字のみを用ゐしめたとい

ふやうな記事が麗史刑法志に見えますし、鐘銘の漢文を書いた牧隱も七八年燕京にあった様に朝臣の多分は韓國時代の日本語のやうに蒙古文蒙古語に通したことは確かです。同時に僧家は指空などの指導の下に西蔵の經文が盛行したことも推定出来、それでこの蔵文鐘銘がある訳ですが、つまり此等の事情は羅麗を通じて今迄神聖の意味しかなかった悉曇が西蔵蒙古の例を見て日用の語に利用せられ得るといふ体験となり、五六十年の後に慈覺尊者等の手で正音といふものを創作することになったことに疑いなしです。此鐘銘の如きは文字の歴史の上から貴重なものですが金石総覽には漢文の銘だけを臚載して居ります。金石拓本のことともそうなると思はれ、さらせることが多かったのでまたウンザリ致して参り、結局はかんじんの研究から離れて真興碑の隨行者位の沙門道人の句だとか、広開土が文選にある広開土宇の名句が六朝の流行字をとったとか、則天以前道教の出なかつた仏法風靡の時代、新羅も法王で開けたことなどから慶尚道地理志にある智異山下花開部曲の아련が剃髮法衣の僧であることなどに思ひ及んで身は六朝のときに在るやうな氣分を味って陶醉して已むといふことになりま

す。
鮎貝は金石文の解説を得意として特に古美術品に関連する解析は定評があつた。前問は鮎貝の速断には蒙古・蔵文の鐘銘が考慮に入っていないという問題があると感じていた。そして金沢の学生でもある小倉に対しても次のやうに述べる。

それから三国史記地理志の地名ですが、之れも幾十年色々と高麗史、金石文等でコチコチやってゐるのですが、新羅の舊記といふものは其实如何程もなく多分は高麗上期（中には中期のものもあり）にデッチ上げたものと氣付きましてはどれ丈、どれ程信用すべきか中々見さかひがつかず、原名の新羅名と句驪名の區別さえ五里霧中になってしまひます。それで金沢君見たやうに一緒くたに考へて議論する氣にはとても成れません。そ

れで之れは一向何の成果も得てゐない訳です。史学雑誌の拙稿は坪井先生が幾十通かの私の間の質問往復の手紙を抜出して自分でまとめて見せられたので、手紙には書いたと存じますが、そのときどきの御返事に随分出鱗目に責を塞いだやうなものが、大方の目に入れ(る)べきものではないのが事実でございます。

大正一四年に、前間は坪井九馬三の「三韓古地名考」を補正した「三韓古地名補正」を発表したが、在山楼文庫に残る前間と坪井の間で交わされた書簡は五通で、論文に関するものは三通のみであるが、実際には幾十通もあったようだ。前間は発表した「三韓古地名補正」に納得していないと明かすだけでなく、論文を公表しようという気持ちが無くなったと小倉に打ち明けている。

先つそういふやうな次第で幾十年こんなことをくりかえへして六十四歳まで来まして、やっと少し利巧になつたやうで、今日では自分の研究したことを一般に公表したいといふ念慮だけはすっかりなくなりました。鮎貝君は何だかそんなつもりか今に筆をとってゐるようですが感心です。御若いと申したいやうです。私は現在著作には興味は感じません。之に反して研究の途には精進して利那利那に会得する真実に此上なき法悦を覚えてそれで不足は些しもありません。

昭和四年以降に公表した前間の論文は、次章で触れる「処容歌解説」をはじめ、昭和六年「真興碑につきて」(崔南善宛ての書簡)等二つとも書簡である。前間にとって小倉著『郷歌及び吏読の研究』を得たことは、学問的希望であつた。前間は小倉へ宛てたこの二〇枚に亘る書簡の末尾を次のように締めくくっている。

さあ、これから六百頁四六二倍の立派な印刷と立派な紙で現はれている御高著を玩味仕ります。この上なき期望に満ちた、時めいた気持になつて来ました。拝見致すとしてもそれは外面から批判的の観覧者としてでなく、全くかの月印釋譜に対しましたときの気持で教課書とも、院本ともしてその中に没入しようと存じます。厚く

予め御礼を申上げて置きます。さよなら

小倉の『郷歌及び吏読の研究』が、前間が大正九年から長い間、研究方法に苦悶してきた状況を大きく打破するものであったことを、この書簡が物語っている。

四、「処容歌解読」に関して

前間にとって小倉著『郷歌及び吏読の研究』は、学問的な転換点であると自ら述べるように、論文を公表してきた頃とは異なっている。昭和四年五月八日の後、最初に公表した文章は、将に小倉の著書の書評（「小倉博士『郷歌及び吏読の研究』について」）である。論文としてもう一つ「処容歌解読」（昭和四年九月『朝鮮』第一七二号）があるが、これは前間にとって公表するつもりのない文章であった。前間は、五月八日の書簡の五日後、五月一二日に「処容歌解読」の原稿と共に書簡を小倉へ郵送した。長い間研究方法に苦悶してきたのに「一朝再び前日の阿蒙に非ざるやう」感じて、その嬉しさを小倉に伝えずには居られなかつた⁽¹²⁾と前間は心情を吐露している。よほど前間は興奮していたのだろうか、論文の刊記によれば「小倉博士『郷歌及び吏読の研究』について」を五月十日に記しており、同じ日に「処容歌解題」も記した。五月一二日、前間は書簡で次のように言う。

只今御念書を拝誦致しました。色々御忙しい中に御芳情感じ入りました。オセンチックな字は結構でございます。又朝鮮文字の一文獻が加はると存じて喜んで御成教を御待致して居ります。御写作につきての御下命は小生分際には少々抵り悪く存じます。紀要第一号として世界にインプレッションを永久に残す大作、只金沢・鮎貝氏の旧作が全く是なしとなる点が聊か気の毒に存じました。（金沢は年々練達の士になって関心はあります

まい。鮎貝君はいつも門外逍遥の様ですけれども今尚筆を持つてゐるやうですからコタへましょう。私は御書でうかれて処容歌に和訓をやって見ました。外に見て貰う人は無し早速御手紙を認めましたら執筆中にあまり穢くなりましたので浄書しました。それで之は原稿郵便で差上げました。御暇がございましたら一遍見て戴きます。

前間は小倉の八日附毛筆簡を「オセンチック」と面白がり、この時点で前間は小倉の書評を書いていたのだが、発表することに「抵り悪い」と躊躇した。小倉は「処容歌解読」原稿を一六日に受取り、前間から立て続けに二通もの長文書簡が届き、一七日に返信を認めた。この際、小倉は前間が公表に興味がないと知っていたので、「処容歌解読」を公表することを打診した。

拜復五月八日付今日まで御涉獵になつたテキストに関する御研究の御示教、二十枚にわたる御精細なる御論文にて、真摯なる御態度については私などは及びもせぬ所と、今更くだらぬものを公刊せし事につき後悔致しております。御涉獵になつた資料の中には小生未だ拝見し得ぬものも多く、つくづく用意の足らざりし事を遺憾に存じて居ります。せめて御側にでも居て日夕警咳に接することが出来ましたなら学問も上達し、立派なものも出来ましたらうに、常に語るに友なく問ふに先輩なき目下の私の境涯は誠にみじめなものと御憫れみ下さいませ。私のあの研究は大正一三年の原稿そのままのものでありまして、其の後多少の修正を要すと思はれる点もあり、且つ又資料も少々手に入りましたけれども、御示教によつて今後益々勉強する必要があると決心致しました。御高説は一応拝見致しましたが未だ精読の機を得ません（こんなことを申上げては誠に失礼と存じますが、毎日講義案を作ったり、図書館の事務などに追はれて事実多忙なものですから、どうか御許し下さいませ）併し今後は常に肌身離さず携行して時ある事に耽読啓発する所あらうと存じて居ります。

昨日また処容歌の御解釈御送付下され、飛び立つばかりうれしく、一通り拝見いたしました。これまた精読の期を得ませんと申すのは失礼ですけれども、片っ端から打砕かれて行くやうな気持はいたしますけれども私を可愛がって下さる御真情の発露であることも私はよく存じて居りますので、御とうさんに叱られた気持で、玩味に玩味をいたして拝読して居ります。下らぬものをこんなに真剣になって読んで下さる方があるかと思ひますと、全くうれし涙にくれてしまひます。御同様と申しては先生に對してすみませんが、私は今日まで、又現在でも日蔭者として世に時めく時とは御さいませんが、御ひとりでもかくばかり御親切に遺憾なく私の心中を解剖し諒解して下さる方のあることを考へますとき、茲に無上の満足を得、限りなき光明を認め得るのであります。

再三の御示教に對し何とか弁解でも申上げねばならぬことも御座いますようですけれども、昨今御高見の玩味に脳中が一杯でありまして、しばらくは秩序が立ちさうもありません。処容歌の御解釈は私か私すべきものでは御座いませぬ。機会がありましたら、あのまま公表させて頂いてもよろしう御座いませうか。勿論活字の困難が伴ひますから、望み通り成功するかどうか疑はしくありますけれども、とにかく御諾否の程御□の節御示し願ひます。次々教へて頂くことは私の最も熱望する所でありますし、学問の進歩の爲にも願ひしい事でありますけれども、貴重な時間を御手紙に御さきくださることか、勿体ないやうな気がしてなりません。併し前述のやうに愚息と思し召し御暇のあり次第、御遠慮なく痛棒を喰はして頂きます。

学務局では人気取りか、宣伝の目的かで、諺文綴字の改良をやると宣伝しました結果、近日中委員が設けられるさうです。最初は私にでも纏めさせるやうな考へでやりだしたやうでありますけれども、いくら馬鹿な私でもその手には乗りません。学務局が発案したならば局内の大家がやったらよいではないか。自分が出来ぬとい

ふことになつて他人に依頼するとはけしからぬ、私は総督府の御用をとめる人間では無い。全く中立の立場にあるのだ。いくらでも悪口は言つて上げる、委員は眞平御免だと申して蹴飛ばしてやりました。それからすつたもんだの活躍があつて、私は条件づきでやむを得ず委員の片端に列することになりました。結果はどうなることやらわかりませんが、いやはやとんでもないことになつたものです。

こんな下らぬ事を書き立て、御示教の御礼とすることは誠に御無礼と存じますけれども、どうも落ちついた氣持になれませぬので、これで御免を蒙ります。前に申上げました通り、学機で小さい辞書をやることになりました。してからは、そちらに氣が引かれますので、近日中図書館の方もやめ、愈々籠城生活に移りたいと存じて居ります。先は右のみ。

小倉が前間に対して「私を可愛がつて下さる御眞情の発露であることも私はよく存じて居りますので、御とうさに叱られた氣持」という感情を持つていた事実は非常に重要である。また、学務局が諺文綴字の改良を本当に小倉に纏めさせるつもりだったのかは不明であるが、小倉は諺文綴字改良に関する愚痴を前間に述べており、前間が全幅の信頼をおいている。「近日中に図書館の方もやめ」とあるように、小倉はこの年で京城帝国大学附属図書館長を辞した。前間はこの書簡を受領する前の五月一〇日には『郷歌及び吏読の研究』の書評を記していたので、この間に池内宏に掲載を頼んだ。そして、上引の書簡を受領した後の二〇日、前間は小倉に報告した。

拝啓御多忙の中に再度の御念書痛み入りました。とる手遅しと拝見再三覆誦御懇切なる御作で平素寂寞のみ相感申した胸が御蔭で十年振りに晴れたやうな気分になりました。何卒御暇でも御出来のときは何より御教誨に預かり度存じます。処容歌御叱笑もなく恐縮にぞんじます。之れを御公表下さるとの御命、感謝無此上存じます。何卒宜しく御厚配を願ひ置きます。何しろ東京では全然諺文の印刷が不可能ですから私共が発表は封せら

れてゐる訳でそれが朝鮮で尊台の御力で人に読まれますことは私にとっては望外のことでございます。で一寸序に申し上げますのはその内の吏道の処に「乙良」を을란と訓してゐますのは尊台の御定読では。란になります訳ですが、(私は間違つてゐるかも知じませんが、萬曆前後の用方から推しまして。大明律の「在乙良」を을란と訓してゐます。乙良を。란か을란と讀むかについてははじめは色々疑問を起しましたが。今では良란は目的格の場合のみに用ゐるものではないから、乙を入れたものは을란で、現在語の을란は鄭松江の関東別曲にも高城을란더만두고三日浦키네자가니とあるやうに古くから을란と語つて来たこと、애란・예란と同じと見てゐます。どうもそれでは定読と違ひますが、まだ改説を致します程には著作によって改めて研究は致してゐますそれも一の私の臆見と見て戴きたいのです。それから六枚目の裏に「가리も뫄고とするが古色もあり」といふ処に「矣の助詞に無理が出来ないが「寢」の字が死にますし」といふ文句を入れたのでございます。其以外は何卒御附印被下まして(前文共)結構でございます。誠に勝手を申して済みません。尤も附印につきまして御存分に手入れを希望致しますは申す迄もございません。それで先日御芳書の御下命で始めは私共の口を出す場合でないと思ひましたがよく考へますと朝鮮語といふものに東京でそう口を出す方もあるまいし、誰も黙過といふことになる折角の御骨折に対して残念と存じまして鉄面皮ながら短文を草しまして御親知の池内君迄同君の世話してゐられる雑誌に載せて貰ひ度と願つて置きましたが、其を同君が笑殺して採用せぬかも知れず、朝鮮のことは存外世間には冷淡であり、どういふことになるかも知じません。併し兎に角君は小倉君とは御懇意の間柄でもあるから是非にとはいつてやりました。近頃はあまり東洋文庫にも参りませず、池内君其他とも久しく逢ひません。池内君には手紙で依頼致しました。また綴字一定委員にも入り御世話下されますよし、文字を法律出身の先生の乱暴の俎上に上げる場合に御説が通つても通らないでも御列席は是非望みます。

前間がいう「六枚目の裏」とは、「処容歌解説」に見える文章で、前間の希望に従って小倉は訂正した⁽¹³⁾。この手紙によって、前間は当初は書評を躊躇していたが、小倉を慮り七月『史学雑誌』第四〇編第七号に「小倉博士『郷歌及吏読の研究』について」を発表したことが分かる。また前間は、この書簡末尾に綴字法に関わらざるを得ない立場の小倉に対して助言をしており、二人の心情が窺える。

昭和三年に、前間は孫晋泰の『朝鮮古歌謡集』に尽力しており、前間自身も八月二五日に『朝鮮古歌謡集』序文に文章を記した⁽¹⁶⁾。昭和四年六月に『朝鮮古歌謡集』が刊行され、前間は小倉に書評を書いてほしいと考えていた。丁度、五月一九日『京城日報』にて、小倉は師・金沢庄三郎著『日鮮同祖論』の書評を発表したところであった。六月二四日、前間は再び小倉に書簡を認めた。

拝啓過日は御端書で痛み入った御挨拶御返詞も申上げんでました。金沢氏近著の御評痛快に存じます。言語を母の胎内から私共は持って来たとは新説です。一兩日前に白鳥氏に面晤三韓以来の語につきても色々御談を交へましたがヤッパリ流石は学士院の重鎮ですから我々と観測の運行軌道が全然違つてゐると思ひました。いはば白鳥氏は太陽系の運行を系統的に理解し、私などは月が地球の周りを三十日に繰返へしてゐる通路に彷徨してゐて、言はば月世界にゐて不完全な望遠鏡といふより遠目金で自らの近所を少々見て居る位違ふと存じました。兎ても天体を論ずる資格はないことをつくづく明らめました。白鳥氏には一昨晩幾年間トッテ置きの新発表を東洋文庫でせられました。類諭の小生は夜遅くなり途が遠いので参りませんでした。

筆をとりましてついまた脱線してしまいました。が実は本日は折入って御願があつてそれを申上げる積りなのです。今回は駿河県の刀江書院の尾高豊作氏が出版して呉れました孫晋泰君の日本訳『朝鮮古歌謡集』が出来ましたので、それには私も昨年来孫君のために頗る骨を折りましたから、是非これは一人でも世間に多くの読者・

共鳴者を得て私共が有つてゐる朝鮮の理解を広げたいと存じてゐます。これで著者でも出版者でもないもので余計の御世話ですけれども京城ではあなたに日本文の新聞雑誌にその御見解御批判を掲載せられることを希望してゐる訳です。本は一寸美しく善く出来てゐますから私から色々御世話になつてゐるあなたに一本献じる積りで実は包装までも致しました処、刀江書院で御送りすると聞きましたのでこれは見合いました。届きましたら宜しく、届きませんなら早速申越を願ひます。どうか届きましたら御覧の上で是非存分の御批評を希ひます。それで今度京城ではあなたに日本文の方を朝鮮文新聞雑誌には崔南善に私から特に依頼致しました。私は或る博士の如くマーカーキヤンチルスクールに属する学徒ではないことも、著者とも出版者とも関係なく、只横合より力瘤を入れてゐる次第は、あなたなら充分御理解下さることと存じます。何卒宜しく御願致します。刀江書院で此書が同祖博士の新著と一緒に出したことは実に妙な因縁です。

金沢庄三郎著『日鮮同祖論』は、奇しくも孫晋泰著『朝鮮古歌謡集』と同じ刀江書院から出版され、在山楼文庫一五九『朝鮮古歌謡集』に関する新聞広告切抜きには、まさに両書名が並んでいる。七月六日付で、孫晋泰自身も小倉へ書評を乞う書簡を出した。⁽¹⁷⁾前間の許には崔南善から六月三〇日附の返信があり、書評を依頼したことの裏付けも取れる。⁽¹⁸⁾余談になるが、小倉は鮎貝にも自著の書評を頼んでいたようで、鮎貝が前間に宛てた六月二三日付の葉書には「小倉君より批判を求められしも御同様筆を執るの勇氣無之差控へました世界広しといへども此種の理解は二三之人に過ぎず裁断は自覚の時を待ち候より致方無しと諦め居ります」と記している。七月に前間の『郷歌及び史読の研究』の書評が公刊されたが、小倉は毎年恒例の方言調査にでかけていた。七月一〇日に小倉は前間に宛てて葉書を書いた。

拜啓 二十日間ばかり咸南各地を猪の如くくぐり廻つて昨夜帰宅、いつも変らぬ御懐しみある御手紙を拝見誠

に忝く存じました。孫氏の著書も届いて居りました。私の批評する畑ではないと存じて居りますが。…又愚著に對する史学雑誌上に於ける御批評も取急ぎ拝読いたしました。仰せに従ひこれから十分勉強して見たいと存じております。はがきでの御返事大変失礼ですが、とりあへず御礼申し上げておきます。七月十日

一ヶ月後の八月一二日、小倉は前間に「処容歌解説」を雑誌『朝鮮』に掲載する旨を伝えた。

拝啓久しく御無沙汰致して居りますが、益々御元気に御過しのことと御察し致します。小生も其の後何等の變りもありませんが、此の夏休みにも碌な仕事も出来ず御恥づかしく存じます。六月末から七月にかけて、例の調査で咸南地方を二十日間ばかり旅行いたしましたのと、一週間前黄海道谷山新溪地方に三四日出かけたきりでありまして、避暑どころの騒ぎではありません。今年十二月頃黄海道全部の調査を終へたいと希望しております。さて、嘗て頂戴致しました処容歌に對する御批評 何らかの雑誌で公にさして頂きたいといふ事を御願ひし御許可まで得たのでありますが、今日まで延引いたしまして誠に御申訳が御座いませぬ。実は御許可直後学務局編輯課長に會ひ「文教の朝鮮」といふのに掲載方を依頼し大体承諾を得たのでありますが、編輯に當る者が、活字の事やら何やらで気が進まなかつたのか、私の処に相談に来ると申しておりながら、更にそれを実行するやうな様子が見えませんでした。私が又頭を下げて懇願するのも馬鹿馬鹿しい。ままよと思つて居る間に一月ばかり夢の中に過ぎ、これはいかぬと、更に方針をかへ、今度は御用雑誌『朝鮮』に頼みこみ、強談判に及びました結果、やっと承諾してくれました。多分九月の同誌に掲載せられる事と存じます。御認めになつた原稿を印刷所に廻すのは勿体ない、永久私が頂戴いたしておくといふ意味で、原文通り別の原稿用紙に書き換へ、簡単な小引を附して渡しておきました。まだ私の研究で到らぬ所も多々御指摘下さいましたので穴にでもはいりたいやうな気持のするところも御座います。どうぞ今後とも十分御鞭撻下さるやう御願ひ致します。

掲載雑誌は寄贈方を依頼しておくつもりです。先ハ経過御報告旁々おわび申し上げます。時下炎暑の砌呉くれもお大事に遊ばされるべく、尚ほ奥様にもよろしく御傳声下されたく御願致します。

御令息芳彦氏が「家庭のダンランを顧みず⁽¹⁹⁾」と述べるように、小倉は六月下旬〜七月九日まで、そして八月上旬と二度も調査に出かけ、近三か月の間、多忙を極めていた。五月に受取った「処容歌解読」は、小倉の言葉通り、九月に『朝鮮』に小倉の小引を付けて発表され、原稿は現在でも小倉家で保管されている。小倉は小引で「私にとりましては最も感謝すべき、真摯なる批評と指導ををしまれなかつた方⁽²⁰⁾」と前間を評し、公表が遅れたことは「私にとって絶えざる苦痛の種だった」と、この三か月間の心中を記している。この書簡から一週間後の八月一九日、前間は再び小倉へ依頼をした。

拜復今年の暑さは頹齡と共に頗るこたえましてつい御無沙汰を申上げ相済みません。御障りもなく此程も御旅行との仰何より慶賀仕ります。扱彼の舊稿につきて不一方ならざる御配慮をかけまして御挨拶の致しやうもございませぬ。只一度見て戴いて御一笑を得たいと願ひましたものが公表下されて世の中の人に見て貰ふことは光栄には存じますが就ても尊台の御寛大と学問に御精進の御態度には只々敬服致して居ります。種々と御心痛を掛けましたことは色々感銘仕ります。此暑中は上述のやうな訳で他出も致さず訪客等もなく（よく来る浅見君も今春藤沢に越しましたので滅多に逢ひませぬ）近業といふものは更にございませぬ。朝鮮に居りましたら本屋でも漁るのですが東京では此節は展覧会でも朝鮮本などは滅多にございませぬ。そして世の中が此節大分様様が変わりました（自分の残されぬは思ひませぬ）私共の考へてゐることと世間で考へてゐることは対角線のやうになってゐますから、時々ラヂオで総合を極度に試みた新学説のいい加減の講釈を聞いてあきれてゐる位です。それから、いつぞや一寸御願致しましたあの朝鮮古歌謡集のことですが御迷惑とは存じまずけれど

も何か御都合がございましたら御感想でも何かに御洩しは叶ひますまいか、過日も孫君が来ましてそれ願って呉れと申しましたから。丁度今度又別の本で釜山の金素雲といふ若年の詩人が北原白秋などの引立てで朝鮮民謡集といふのを出しました。これは詩人だけで翻訳は手に入つたものです。併しあまりに日本詩想になつてしまつて孫のまづいビジン日本文の方が朝鮮味はあると思ひました。金のは、時調でなくアラランなどの俗歌で色々嶺南に歌はれる近代のものを集めてゐます。あなたは文学はと御謙遜でございましたが、学問的といふでなく御感想が伺ひ御紹介が願はしいのです。あの本も存外に内鮮共々もこの方面に反響がありましたやうです。

前間の再三の依頼にもかかわらず、小倉は書評を書かなかつた。「私の評する畑ではない」というのが、口実なのか真実なのか不明である。この間前間は八月四日に、早稲田大学の院生だつた李相佰(2)の論文に対する批評「庶孽考」を記し、秋に高橋亨へ送つた。また、前間は一〇月一三日に慶應義塾で「朝鮮人の由来」を講演した。更に孫晋泰に宛てた十一月二六日付の書簡には「明後日に帝劇の西部戦線異状なしを見にいくつもりにて甚だ緊張致し居り候」と述べ、元氣なことを窺わせるが、翌年八月に体調を崩し、一〇月には福岡の箱崎に隠居した。一方、小倉は土田杏村と自著に関する論争を行う。小倉は前間の病状を心配するとともに自身の孤独を嘆いている。

昭和五年九月七日消印（葉書）差出人・小倉進平、受取人・前間恭作

拜復度々御たより頂き誠に有りがたく存じます。過日上京せられた高橋氏より最近承つたところによれば此の間御病氣にて御静養中の由御こまりの事を深く御察申上げます。朝鮮学御指導のため一日も早く御恢復遊ばされん事を切に祈り上げる次第で御座います。小生日々勉強に志しては居りますけれども些かの進境なくこのまま朽ち果てるかと甚だ心細く存じて居ります。尚此の上とも御鞭撻賜はりたく切願いたして居ります。御示教にあづかりました叫今の語源、大陸方面には類語を求めかねて甚だ疑問に思つて居りましたが、御話しに

より或はさうかも知れぬと、活路の開かれたことを深くよろこびと致して居ります。先はとりあへず御返事まで 不

五、むすびに代えて

前間が再び『郷歌及び吏読の研究』に關することを言いだしたのは、昭和六年一月の書簡である。昭和六年一月の年賀に、小倉は前間に「朝鮮語の『ひつじ』と『やぎ』―辛未の歳に因みて―」(『小倉進平博士短編集』所収)を郵送した。前間は正月六日に返信を書いた。

これ話は違ひますが、いつか申上げて置かうと思つたことですが、あの紀要の郷歌吏読研究の高著中第二編第六章の御説明の中で和語類解を京都大学蔵の写本によって挙げて御出でになるが、洪舜明の和語類解二十巻は康熙庚午に司訳院で金指南の訳語類解の出ると間もなく出来たもので康熙中に司訳院で刻出せられてゐます。

その刻本は金沢氏も一本を蔵し、たしか岡倉氏も一本を蔵してゐられる筈です。以前はよくあつた本ですが私はいつでも手に入ると思つて買つてゐません。つまり訳語類解を和名で編じたものなので。かの交隣須知も畢竟それを見て対州の朝鮮通詞と朝鮮の日本通詞が協力で出来たもののやうです。

小倉著『郷歌及び吏読の研究』第六章「従來の吏読研究」は、わずか千二百字程度の文章である。前間は予め中村庄次郎に古い『交隣須知』について問い合わせており、この年の夏、前間の許に中村庄次郎から『交隣須知』が届き、前間はそれと一緒に送られてきた『朝鮮向覚書』とともにそれを筆写した。そしてそれら筆写本と旧蔵の『外務省版隣語大方』と共に、前間自著の解説原稿「交隣須知と隣語大方」と浄書「校訂交隣須知の諸言と批評」の小

冊子二冊を添えて小倉に送った。昭和六年一月六日、前間は「東京ではどうも本の利用が多くないやうに思ひまして且あなたが御いになるといふので特に願出ました次第です」と手紙を認め、東洋文庫ではなく敢えて小倉のいる京城帝国大学に寄贈した。それがソウル大所蔵『交隣須知』三冊（貴三八七〇）と『朝鮮向覚書』一冊（四二〇〇）・『外務省版隣語大方』三冊（三八七〇）である。

中村庄次郎（一八五五—一九三二）との交流があったのは、前間恭作である。中村庄次郎が亡くなる直前の昭和七年一月一日、前間の仲介を得て小倉は中村を訪ね、『交隣須知』（前間筆写本の底本）やその他の蔵書を譲り受けることになった。小倉は『交隣須知』に就いて「で前間の原稿に基づき資料について説明し、前間の原稿と浄書の小冊子二冊は手許に保管した。」

小倉著『増訂朝鮮語学史』に補注を施した河野六郎は、京城帝国大学創立以前、朝鮮語の研究に献身せられた先覚は、金沢庄三郎・鮎貝房之進・前間恭作の三先輩の名を挙げれば十分と評し、京城帝国大学開学と同時に着任した小倉進平が、朝鮮語の言語的研究方向に決定的寄与を為したと言⁽²⁾う。前間恭作と小倉進平の交流を見る上で、昭和四年『郷歌及び吏読の研究』がどれほど二人にとって画期的なものであったかが窺える。昭和七年には、前間は小倉から『月印釈譜』巻二の喜方寺板新刷を、昭和九年には同書巻一三・一四の天順初版を寫させてもらうなど親しく朝鮮古語文献資料をやり取りするが、前間は論文を書かなかつた。前間は妻を亡くした後、『朝鮮の板本』を出版した。昭和二二年九月二一日、それを小倉に進呈した際の書簡に「当座私の健康が頓に変わりまして旦夕その迹を追ひそうな状態でございましたので、その場合生前に御眷愛を蒙りました方々特に私のしやうこともない研学に御指導をうけました方に告別と御礼の意味を兼ねて何か請益の御志るしを奉呈したいと存じまして継嗣の従子於菟猪夫妻に囑して旧作に自分で補筆を加へました小冊子を印刷しました」と前間は記し、永き師友として感謝してい

注

- (1) 「郷歌・史読の問題を繞りて」(『史学雑誌』四七ノ五、昭和十一年五月)と『交隣須知』に就いて」(『国語と国文学』一四六号第一三卷第六号、昭和十一年六月)。
- (2) 『東京大学コリア・コロキウム講演記録』、二〇〇九年度、一七頁〜三三頁。
- (3) 三元社、一九九九年。
- (4) これらの資料は学習院大学東洋文化研究所へ委託された。
- (5) 前掲注(1)「郷歌・史読の問題を繞りて」。
- (6) 『前問恭作著作集(下)』京都大学国文学会、「処容歌解読」、四一〇頁。
- (7) 在山楼文庫一八九の大正九年一〇月一五日附、多田桓書簡を参照。書簡には京都帝国大学文科大学が多田講師に宛てた百円の支払書と前間に宛てた書簡が入っており、『龍歌物語箋』に対して多田が感謝の意を込めて前間に百円を送ったことが分かる。多田桓は、陸軍留學生として渡韓し、群山分館主任であった。また

多田は明治二十八年六月一日に内閣補佐官として雇傭され(内閣補佐官(多田桓)雇傭契約書、奎三三〇七八)、外務省書記生となり仁川領事館に勤務、明治三十九年には群山理事庁属統監府通訳官で、四〇年一月二十五日から韓国政府からも俸給を受けている(『官報』、奎一七二八九―一四七)。明治四一年三月六日には総督府通訳官として勲四等八卦章を受けている(『官報』、奎一七二八九―一三三)。退官後、いつ京都帝国大学の講師になったかについては、現在調査中である。

(8) 東洋文庫所蔵『龍歌古語箋』(一―一―一―一)「今では自分は朝鮮語などと殆んど交渉もない身分であるが、過去を顧みると、かの韓語通一冊では如何にも此方面に努力をしなかったやうで、物足りなかつたから時々暇があつたから此朝鮮語変遷といふ方面で兎に角今迄に得た自分の監察の一部丈けでも記述して置きたいと思つてゐた所が、此一月に京都大学の多田君から龍飛御天歌の読方について質問をうけた。自分は之を一機会だと思つたので、早速起稿にとりかかつて一ヶ

月計りで出来たのが此一篇なのである」。

(9) 東洋文庫所蔵、八四一D一五。

(10) H・B・ハルバート (Homer B. Hulbert, 一八六三—一九四九) は米国の神学者・ジャーナリストで、ダートマス大学を卒業しニューヨークのユニオン神学校で神学を学んだあと、ソウルの育英公院の教師に赴任した。一八九一年—二月に帰国し、一八九三年九月に再度来韓し『コリア・レビュー』の編集を掌った。なお小倉進平は、昭和十年に「ハルバートの朝鮮民族び朝鮮語論」(『民族学研究』第二卷第一號別刷) を書いている。

(11) 拙稿「前問恭作と鮎貝房之進の交流」在山楼文庫資料を通して、「年報朝鮮学」一五号、二〇一三年。

(12) 前掲注(6)「処容歌解説」四二—四三頁。「処容歌解説」冒頭に「拜啓 暫く玉著に沈潜して耽読に酔ふつもり、当分何も申し上げない考で居りました処が、私の進境は御教誨のために一朝再び前日の阿蒙に非ざるやう感じまして、その歓楽は譬へん方なく、一つ郷歌の一首を諺譯して千年の昔をしのびたいといふ妄念が起り、均如歌などとはとても齒に合いませんから、先づ例の誰でも食ひ付く、いろは同様の簡易な処容歌をやってみましたら、読めるものが出来たじゃありませんか。それで御笑かもしれませんが御目にかけなければならぬない気になりました。これは全く御著書を読まなければ

ば及びもつかない意外のことですから、どうぞ御禮のつもりで見て下さいませ」とある。

(13) 前掲注(6)「処容歌解説」四二—四三頁。

(14) 前問の原稿では「サリも天斗の方が古色があるとも言えますし」とある。

(15) 拙稿「前問恭作と孫晋泰—九州大学所蔵在山楼文庫資料を中心に—」、『近代書誌』(韓国近代書誌学会) 第四号、二〇一一年、参照。

(16) 学習院大学東洋文化研究所蔵末松保和関係資料(二一七—二二二)は、前問直筆筆控原稿「孫晋泰の朝鮮古歌謡集の発刊につきて」(全十四枚)である。

(17) 小倉進平宛、孫晋泰の書簡に言う、「拙著『朝鮮古歌謡集』は刀江書院より既に先生の手許に届いてゐるものと存じます、前問先生や石田幹之助よりもお話があったものと存じますが、御多忙中誠に恐縮乍ら、何かの紙上に忌憚なき御叱言を賜はらば無上の光栄に存じます、先は御願ひまで 匆々頓首 七月六日」。

(18) 在山楼文庫所蔵、昭和四年六月三〇日附、差出人… 崔南善、受取人… 前問恭作「拜啓度々御鄭重なる御芳墨を戴きながら御返事すら相愈り申しまして誠に申し譯ありません。さり乍ら文通の有無と景慕の惻誠とは自ら別事であるを御諒察下されば幸甚此事に存じますサテ此度は孫君の苦心に成る『朝鮮古歌謡集』の御患贈に預かりまして御懇情重々銘肝致しますが殊に表裏

巨細を通じて編者以上の御配慮を加へられ 御賢勞あ
つて始めて此業績ありしことを拝察するにつけ 何時
も乍ら朝鮮文化の爲め御苦勞なされる盛意を今更感謝
に言葉なき次第でござります 我々のこの□戴は固よ
り一般且つ永久たるべきことであります 平素此方面
に人知れぬ苦衷を抱き居る小生に於きましては頌榮の
情自ら格別なるものがあります 御懇恵の根柢上紹介
の件は一読の上及び丈のことは致す積りでありますが
取込のことありますから少々遅れるかも存じませぬ
此如御海洋下さいませ 先づは致謝旁々寸楮草々」。

(19) 小倉芳彦『贅疣録』（私家版）、一九八七年、「朝鮮
と父」、七〇頁参照。

(20) 前掲注(6)「処容歌解読」、四一〇頁。

(21) 「朝鮮人の由来」という題名で、雑誌『刀江』（昭和
四年二月・昭和五年一月）に分載。

(22) 『小倉進平博士著作集(四)』、河野六郎「故小倉進
平先生と朝鮮語学」、一九七五年、三頁。